

# 『三冊のロング・グッドバイ を読む』 (松原元信著)

## を読んでの雑感

牧草 泉

新聞の広告欄を見ていたら、面白い本が目にとまった。  
『三冊のロング・グッドバイを読む』とある。そこでアマゾンから早速購入。

書店にもバスを利用すれば行けないこともないが、送料無料とあり、であれば書店に行くよりも割安だという計算が働いて、アマゾンに頼った。今は流通革命の真つ最中なのだ。紀伊国屋は大丈夫なのかな? と勝手に思ったりした。

低所得層の頭にまず浮かぶのが「節約」の一語である。若いときから年配者の貧困を見て育ってきたから、お金だけは貯めておかないと、と思いつつ日々を送ってきた。しかし、結局サラリーマン生活では、預金はたかが知れたものだった。他に才能がなく、若いときから先が見えてしまっているという、起伏の乏しい人生だった。もっともこれは自己責任ではあるんだが・・・。

市役所を辞めて大学院に行った人の話、会社に勤めながらこつこつと勉強して弁護士になった人の話、家庭を切り盛りしながら育児の合間に英語や韓国語の勉強をして、二か国語の通訳になった主婦の話、そんな華麗な転身? 変身? を耳にしながら、何度うらやましいと思ったことか。そうしてその度に自分を省みるとき、そんな才能は片鱗もないことを再認識して、サラリーマンに徹してきた。足蹴にされても我慢、罵られてもひたすら耐えてきた人生。

しかし、少なくとも自分の職責は果たしたという自負心を持つことができたのは、不幸中の幸い? だった。もっとも、他人から見れば、「お前は会社のお荷物だった」というセリフが出てくるのかも知れないが・・・。

そこで、財布の底にちゃらちゃらしている、硬貨を拾い集め、『三冊のロング・グッドバイを読む』を購入した。

内容は、原文と清水俊二の訳文と村上春樹の訳文の比較である。判定者は著者、松原元信。早稲田大学を出て商社マンとなり、海外勤務が長く、現在は悠々自適の生活。

もちろん原文へのクレームはなし。原文に手を入れることができる者は日本にもそれほどいないはず。だからこれは当然だろう。

著者は、原文から問題点、あるいは話題性のあるセンテンスを抜粋して、比較論評している。

私はこの著書を手にして、昔の体験を思い出した。二十代だったと思うが、たまたま手にしたのが川端康成の『雪国』の英訳本(サイデンステッカー訳)に関する著書だった。

名前は忘れたが、日本でも有名な翻訳家の書いたものだった。読んでみると、内容はすべて「サイデンステッカー」の翻訳はすばらしい」という称賛で埋め尽くされ、しかも具体的にどの訳文がいいという、そのセンテンスまで示されていた。

ところが、そのように書き示されても、その名訳の理由がわからない。つまり著者がいくら褒め称えても、それに首肯できないのだ。その原因の一つには私の英語力のなさがある。おそらくその当時は、「高校三年生程度の実力？」ではなかったかと思う。しかし英語力がなくても読者であることには変わりはない。いくらかの金銭的負担に耐えて購入している読者なのだ。批判する権利はある？ と思ったものだった。

つまり英語力のない者の立場、換言すると読者の立場からすると、「なぜ名訳なのか？」を示してくれていない。だから、その著書には一文の価値もないのだ。新興宗教の教義を丸呑みにさせられるような気分だった。

著者は「汽車がトンネルを抜け出たときのその前方の風景描写がすばらしい」と言って、その英訳文を示す。

「The train came out of the long tunnel into the snow country. The earth lay white under the night sky. The train pulled up at a signal stop.」

このスレッドを何度も読み返した。しかし高三程度の英語の実力では、良いも悪いもわからない。名文なんだと思っただけで、「そうかなあ」と思うだけだった。

そのときふと思ったのが、「いい、悪い」の基準の持ち

合わせがないということだった。高三程度の実力では読むのが精いっぱい、いいとか悪いとか、わからないのは当然だろう。しかしそのとき、「わからないのはこの俺だけなのか？」と思ったことだった。

英語の文章の良し悪しを理解できるのは、この著者のように翻訳家として英語の分野で専門的に携わっている人以外ではないのではないのか？ と思ったのだった。当時それほど巷に英語に長けた人材はいなかったはずだから。

次に思ったのが、この文章が名訳であるのなら、「そうでない英訳文をなぜ提示してくれないのか？」ということだった。そう思うなかで、「比較することの大切さ」を一人実感したものだ。この時の感激は今でもはつきりと記憶に残っている。

もちろん他の資料から悪い文例？ をもってくることはできないだろう。しかし少なくとも、自分で作文をして、「こんな書き方もあるが、これよりは訳者の文のほうがはるかに勝っている」などと例文を併記して記述してほしかったと思う。

著者は有名な翻訳家だったとしても、この著書に関しては画竜点睛を欠くといわれても仕方がない。

一応読み通したものの、それだけで終わった。しかし、この著書は頭に鮮明に焼印された。誰から教わるでもなく「比較して考える」という大切さを身にしみて実感したのだった。つまりこの著書は反面教師だった。

ひよっとしたら、『雪国』の『英訳本』の宣伝、販売促

進を意図しての（やらせ）の著書ではなかったのだろうか、後で思ったことだった。

理系の大学院を出た友人から教わったのだが、彼は「理系の実験では常に比較する。化学物質の含量は平均値と比較して多いのか、少ないのか？ 環境の違いによる比較など、要するに比較することこれが大切だ。数値だけではほとんど意味がないんだ」と言った。そのとき、この友人の言に至極納得したことを覚えている。

ちなみに、『雪国』の出だしのスレッドだが、ネットをサーフィンすると、いろいろ見方があるようだ。ほかにも、例えば『日本文学英訳の優雅な技術』とか、「川端文学『雪国』の一節』二人の英訳を巡って」（撫尾清明）、『比較文学年誌』第一号他」なども参考になる。

とにかく、この作品『雪国』の周辺を探ると、推理小説を読むようなスリルがあると言えはげさだろうか。

ところで、ネット、その他の資料では、サイデンステッカーの訳文が、必ずしもベストでもないという評価もある。特に英語を母国語とする関係者からは、それほどの賛辞は聞こえてこないようだ。

例えば、  
原文

「夜の底が白くなった」

サイデンステッカー訳

「The earth lay white under the night sky.」

ちなみに翻訳家高橋泰弘は「これをベストとする」。

これについては英国人ジェームズ・カーカップは「The bottom of the night became white.」  
がベストだとする。

サイデンステッカーは、頻繁に訪日し、東大でも学んだことのある知日家・親日家である。だから、日本の慣習をかなり学習したうえで、『雪国』を米語訳したといってもいい。高橋泰弘によれば、「日本語特有の微妙な表現が見事に訳出されている」という。

サイデンステッカーは、『源氏物語』も米語訳しているが、アーサー・ウェイリーの『源氏物語』の英訳書に比して、英米文学としての評価はそれほど高くないようである。この違いはどこから来ているのか？ ちなみに、アーサー・ウェイリーは訪日の経験はない。また、ウェイリー訳は、原書に忠実ではない（井上英明）という批判もある。

たとえば、六帖「未摘花」の出だし部分は、次のようである。

原文

「思へどもなほ飽かざりし夕顔の露に後れし心地を、年月経れど、思し忘れず、ここもかしこも、うちとけぬ限りの、気色ばみ心深きかたの御いどましさに、け近くうちとけたりしあはれに、似るものなう恋しく思ほえたまふ。」

サイデンステッカー訳

「Though the years might forget “the evening face” that had been with him such a short time and visited like the dew, Genji could not.」

アーサー・ウェイリー訳

「TRY AS HE MIGHT, he could not dispel the melancholy into which Yugo, s sudden death had cast him, and though many months had gone by the longer for her passionately as ever.」

この両者の訳文を比較すると、その立ち位置が、アーサー・ウェイリーは英文学から『源氏物語』を英訳し、サイデンステッカーは英文学と日本文学の立ち位置から『源氏物語』を英訳しているといえると思う。特にサイデンステッカーの英文訳の例は、英米文学では珍しい装飾のない表現となっている。日本的というより漢文スタイルのスレッドだなどと思つたことだった。この差異が、英文学的評価の差異として表出したのではないだろうか。

韓国の著名な作家김영하(金英夏)が短編『남만적 서사와 유적』で、欧米文学の冗長さをアイロニカルに指摘している。これも前二者の評価の違いを検証する場合の参考になるはずである。この短編は知的ユーモア溢れた作品で、眼が眩むほど面白い。二千五年に現代文学賞に入賞している。李箱文学賞をもらつても何ら遜色はない作品である。この短編は時代を超えた不朽の名作となることは間違いない。ぜひ読んでほしい作品である。しかし残念ながら日本語訳は出ていない。ちなみに、김영하は二十六年に『천국의 문』で李箱文学賞を受賞している。

ところで、この著書『ロング・グッドバイを読む』は清

水訳と村上訳について比較がなされている。実際に目を通して見ると、面白い。著者の英語力も相当なものを見た。それだけに、英語力のある人にとっては、面白い読み物となっている。

もう一つ、この著書に関して興味があつたのは、村上春樹がなぜ『ロング・グッドバイ』の翻訳に手を染めたか？である。清水俊二は翻訳家としてよりも映画の字幕作成者としてよく知られている。若いときよく洋画を見たが、秘田余四郎、清水俊二などは字幕作成者としては常連だった。

字幕作成はスク립トに忠実に訳しては、字幕としてはまったく不可能だ。スクリーンは瞬時に流れる。だから仰天するような訳がなされる場合がしばしばある。

そこで、ハードボイルドの訳では、清水俊二に敵う者はいないだろうと思つていたので、「村上はこのベテランの清水訳を読んで、なぜ清水に挑戦したのか？」と思つたのだ。

実は、清水訳に誰が挑戦しようと思つていないと思つていたので、ノーベル文学賞候補の村上春樹でも、と。だからあえて負けを覚悟で挑戦する村上春樹については、敬意を表しながらも、なぜ？ という思いが常に消えなかつた。

村上の『ロング・グッドバイ』のあとがきを見ると、その理由が述べられている。一つは、清水訳が出てから二十数年が経つから、ということだった。これは納得。大体新旧交代の時期ではある。これは他の翻訳書を見ても納得がいく。それなりに読者を獲得している外国書は大体二十年前後の間隔で新訳が出ている。

しかし村上春樹についていえば、これは表面上の理由だろう。じゃあ、次なる理由は？と期待したが、これは表示されていない。

そこで、推測になるのだが、前述の一般論として、社会の進化とともに翻訳も進化すべきだということの理由の他に、村上としても期するところがあつたのだと思う。ではそれは何なのか？

「たぶん」という副詞が付くが、それは一つには、清水が字幕作成者であつたこと。このことは著者松原も指摘する。松原は清水俊二を賞賛しつつも、こう言っている。「映画字幕は翻訳ではないし、その逆の翻訳は映画字幕ではない、もまた真なのだが・・・」と。鋭い観察である。大仰な言い方になるが、これは、この著書の根幹をなしている思想といつてよい。こういう判断をしたからこの著書は生まれたといつていいだろう。

村上の思いもこちらあたりであつたのだと思う。確かに、この作品はスピード感があつて、正に「ハード・ボイルド」の推理小説なのだ。だから清水が飛びついたのも理解できる。清水は、この作品を映画のシーンと捕らえて翻訳していった。換言すると、映画『ロング・グッドバイ』の字幕を作つた。そこで村上は、小説として翻訳しようと思つた。つまり清水の『ロング・グッドバイ』と村上の『ロング・グッドバイ』は、全く視点が異なるのだ。

両者の訳を比較すると、清水のほうが、はしよつた箇所が多い。それも極めて多い。これは松原も頻繁に例示してい

る。このことから、清水は字幕作成的翻訳をしていったことが改めて理解できる。村上訳を見ると省略したところはあるが、清水訳に比較するとずつと少ない。うがつた見方になるが、村上は、「原書にできるだけ忠実に翻訳すれば、清水訳とは違つた翻訳ができる」と、つまり、村上流「ロング・グッドバイ」が生まれる、と思つたのだろう。

ところで問題は清水と村上の翻訳した二つの『ロング・グッドバイ』の読後感である。はじめは読みやすいのは、清水訳で、村上訳は読みにくいだろう、と予想していたが、実際に読んでみると、村上訳のほうが、ずつと容易だつた。これは意外だつた。「清水や字幕を得意とするから、あまいな訳はなく適語訳だろう、だから読みやすいに違いない」と思つたのだが、全く逆だつたのだ。足早に読み進めることができたのは村上訳のほうだつた。清水と村上の世代はかなり隔たつているのだが、言語学的な時間の差はないといつていい。では、どこにその読みやすさと読みにくさの違いがあるのか？この回答はまだ出せていない。今もつて不思議な気がする。

いろいろ気になるところはあるのだが、一つだけ挙げておこう。

何頁だか忘れたが、「・・・ing」を、清水も村上も、「・・・しながら」としている。日本語に言う「・・・しながら」は、時間的に長いタイムを意味し、「・・・ing」は、長いタイム、短いタイムいずれをも意味するのではないか、ということである。したがって、「・・・ing」を機械的に、

「・・・ながら」と訳すると、ハードボイルド小説では、緊迫感のないシーンとなってしまうのではないか、と思つたとだつた。

この著書で、惜しいと思つたのは、著者・松原元信訳が少ないことである。他人の訳をうんぬんするのであれば、自分の訳も清水訳と村上訳と並列して松原訳も積極的に示してほしかつたと思う。もつとも、中盤になると、かなり行司役の立場が鮮明になり、裁定が明瞭になっているから、それほどクレームはつけないのもいいのかもしれないが・・・。

著者は翻訳の大先輩清水俊二とノーベル賞に最も近いと言われる村上春樹に配慮してか、敬称や敬語がかなり目につく。これはちよつといただけでない。特に私的に近い関係にある場合は別として、敬称・敬語は極力避けるべきだろう。無用な敬称・敬語があると読みにくいことおびたしい。気が咎めるのであれば、末尾に「敬称略」とでもしておけば、失礼になることはないと思う。

この件については、次のような思い出がある。中学生のころ、新聞配達をしていた。隣の部落の配達を終えて自宅のある部落へ戻るには山道を超える必要があつた。その峠で自転車を止めて配達用の新聞を広げて読むのが楽しみだつた。他人の商品に手を付けることに少し後ろめたさがないでもなかつた。しかし、我が家は貧乏なので新聞は購読していなかつたのだ。

その時に目に付いたのが、夏目漱石の愛弟子ともいうべき小宮豊隆の小論だつた。夏目漱石の思い出を語つた内容だ

つたが、その末尾に、「漱石が亡くなって二十数年にもなるのに、敬称をつけたり、敬語を使っている人がいるが、これはおかしい。かえって故人に対しても失礼だと思つ・・・」と書いていた。今でもはつきりと覚えていた。

文芸評論家小谷野敦も、自らの著書では、この点についてはきちんとメリハリをつけて書いている。だから抵抗なく読むことができる。

結論としては、この著書はほどほどの英語力がある人であれば結構面白く読める本である。英語の勉強中の人にとつても、巷のありふれた平凡な教材よりはるかに効果的だと思つ。 (文中敬称略)